

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：12604

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885027

研究課題名(和文)書くことの言語活動における児童の思考プロセスに関する質的研究

研究課題名(英文)Qualitative research of students thinking process during writing activity

研究代表者

細川 太輔 (Hosokawa, Taisuke)

東京学芸大学・教育学部・講師

研究者番号：70738228

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、新1年生の保護者に学校紹介リーフレットを書くという言語活動の中で、児童が何を意識して書くのかを分析した。その結果以下の3つの意識をもって児童が書いていることが明らかになった。1つ目は相手意識である。新1年生の保護者が知りたい情報を選んだり、失礼でないように書こうとしたりする様子を見ることができた。2つ目は書くメディアに対する意識である。折り方をどうするのか、普段見ているリーフレットに近くなるようにしている様子を見ることができた。そして3つ目は一緒に書いている友達への意識である。児童は友達がどう書いているのか意識をし、そこで助言を受け入れようとする意識が働いていることがわかった。

研究成果の概要(英文)：This research analyzed how students thought during the activity which they write the school introduction leaflet for the parents of new first-year students. This research shows that student's three aspects of consciousness. Firstly, students wrote during thinking of reader. They chose information which parents want to know, and wrote politely. Secondly, students wrote during thinking of media. They reminded leaflets around them, and tried to write like leaflet. Thirdly students wrote during thinking of their classmates. They always observed their classmates, and they learned from classmates writing if possible.

研究分野：国語科教育

キーワード：小学校 国語 書くこと 言語活動

1. 研究開始当初の背景

書くことの指導に注目した研究は、大きくわけて2種類の研究があると考えられる。1つは、児童の思考や考えに注目する心理学的・哲学的研究であり、もう1つは指導法に注目した国語科教育学である。

(1)心理学的・哲学的研究

管見の限りであるが、言語活動を通じた「書くこと」の思考プロセスは研究されていない。心理学的研究では、児童の思考を見ていく研究が行われているが、そこで分析されている対象である「書く」行為は、生活文であり、相手や目的、メディアなどが決まっている具体的なコミュニケーションを想定したものではない。

例えば内田(1990)は児童が作文を書いている過程をつぶさに観察し、そこで考えたことを児童に話してもらい、それを基に作文産出過程を分析した。そこから内田は児童の思考を「プラン」「検索」「喚起」「言語表現化」「読み返し」とカテゴリー分けをしている。しかし、そこで観察された作文は「ともだち」という題を与えて書かせたものであり、具体的な相手や目的があるものではない。

また汐見(1988)は千栄子が亡くなった母についての詩を書き続けた例を紹介している。その中で汐見は、「自分という人間をより他者に向かってやさしく開きたいがためにも、表現し書くのだ」と論じている。しかし、そこで書かれている文章は先生に自分の思いを伝える詩であり、それ自体はとても価値のあることではあるが、実生活に活かすことを目的とした書く活動が対象とはされていない。

いずれも生活文が全盛だった時代の研究であり、現在必要とされるような言語活動を通じた書くことの思考過程は研究されていないのである。

(2)国語科教育学の研究

書くことの指導に注目した国語科教育学の研究に大内(1996)がある。大内は国語科における書くことの教育を歴史的に分析している。大内は本書の中で授業記録の重要性について指摘をしているが、それを使って書くことの過程を明らかにするという目的の研究ではない。また渋谷(2001)も歴史的に作文教材について分析をした上で、個人的心情を書かせる生活作文の問題点を指摘し、一斉学習の場を生かした作文指導を提案している。生活文の指導の問題点を挙げてはいるが、児童の思考過程に注目することを狙った研究ではない。

また細川(2014,2012)は、児童の言語活動を通じた書くことの学習を対象とした研究を行っている。その中で児童の発言や作品などから児童の思考にせまろうとしたが、思考プロセスに注目するというよりは、児童の行為に注目している。また実践者自身が研究しているので、児童の発言や児童の書いた文書から分析するにとどまっており、その背後にあ

る思考をインタビューなどで明らかにするところまでは行っていない。

(3)本研究が必要とされる背景

以上のように、管見ではあるが、心理学的研究や哲学的研究では児童の思考に注目した研究は行われているが言語活動を通じた書くことではなく、国語科教育学では言語活動を通じた研究は行われているが、児童の思考にせまった研究は行われていない。しかし、文部科学省(2008)の学習指導要領の中で言語活動の充実と、言語活動を通して指導事項を学習することが求められており、本研究は至急行なうべき研究であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は2つある。1つ目は筆者が今まで取り組んできた研究をもとに、相手意識、目的意識をもった書く活動の実践を開発すること、2つ目は、その中で児童の表現に至る思考過程を明らかにしていくことである。そこで明らかになった思考過程は、言語活動を分析する指標となり、新たな言語活動の開発につながっていくと考えている。

この研究では具体的な言語活動の中での児童の思考を見ていく。当然そこで試される言語活動は学習指導要領で言語活動例として示されているものだけではなく、海外で行われている activity ベースの学習の方法を取り入れていくことも必要である。

3. 研究の方法

言語活動の中で書いている児童の思考を見ていくことは条件を統制することができないし、児童の学習を止めることもできないので 困難である。そのため量的な方法ではなく、児童の思考を深く見る質的な研究方法を取る。

今までの研究方法	今回の研究方法
・量的な研究	・質的な研究
・児童の学習の結果を見る 質問紙で統計処理	・児童の思考過程を見る(発話の逐語記録、目線、様子など細かく記録) ・授業後のインタビューも行なう。 ・振りかえれるようにビデオで記録
一時間だが、児童全員を見る	抽出時を決め、単元全ての行動を記録

質的な方法で授業中の児童の思考を明らかにした研究方法は様々なところで提案されており(的場・柴田 2013、秋田・恒吉・佐藤 2005、秋田・藤江 2010、細川 2013)、内観法、インタビュー法、フィールドノートに記録していく方法などがある。質的研究法では、大勢の児童を見るのではなく、一人の児童を丁寧に見ていく。具体的には発話の逐語記録で取るだけではなく、目線や、考えている様子など、できる限り細かいところを観察していく。また必要があれば授

業後にインタビューをして、どうしてそのように書いたのか、書くまでの思考プロセスについて質問を行う。1時間に注目してどのように文字を書いたり、消したりしているのかだけではなく、取材や構成、推敲など単元全体で児童の思考を見ていくことで、児童の思考を見ることができると考える。

また後で振り返ることができるように、ビデオで抽出 児の行動を記録していく。その後共同研究者と授業を通して見えてきた児童の思考を議論し、記録にしていく。それを、単元を通して続けていき、言語活動の中での児童の思考を明らかにしていく。

4. 研究成果

(1) 授業について

授業日時 平成 27 年 9 月

対象 東京都 公立 A 小学校 5 年生

単元名 学校紹介リーフレットを作ろう

常に相手や目的を意識して書く

単元目標

- ・相手意識・目的意識を常にもちながら、それらの目的に合わせた題材を選ぶ。
- ・割り付けを工夫し、見出しや絵図を用いながら相手にわかりやすく書いて伝える。

単元の評価規準

関心・意欲・態度	書く能力	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
・リーフレットを書く相手(新1年生の保護者)や目的(リーフレットで学校紹介をして、4月の入学を楽しみにしてもらうこと)を常に意識しながら書こうとしている。	・相手が知りたいこと、自分が教えたことの両方を吟味して題材を選んでいる。(ア) ・適切な見出しをつけ、効果的に絵図を使い、記事の配置を工夫して、見やすくわかりやすく書いている。(エ) ・相手に伝わるように常に自己評価しながら書いている。(オ)	・リーフレットを書く目的が伝わるように、文章全体の構成を意識している。イ(キ)

単元設定の理由

この学級の児童は素直で何事にも一生懸命取り組む児童である。1学期、家庭学習では「ニコニコノート」(日記帳兼自学ノート)を通じて、自分の考えを言葉にする経験や担任や友達とつながる経験を積ませてきた。

「先生と文通しているみたいで、おもしろい。」「いろんなテーマで文章を書くのが面白い。」「という声も聞かれ、書くことを通して自分の考えを表現したり新たな気づきを得たりしている様子が見受けられる。一方で、どんなテーマでも3文足らずで終わってしまい、なかなか内容を詳しくしたり自分の思いを書き表したりすることができない児童も5名ほどいる。また、1学期は授業で書くことの独立した単元は仕組んでいない。したがって、今回は児童にとって相手意識、目的意識を明確にもって書く活動としては5年生で初めてとなる。書く技能をしっかりとつけながらも、「書いてよかった。」「また書きたい。」と児童が思えるような単元にしたいと考えている。

教材観

・相手意識、目的意識をもって伝える言語活動

児童は高学年になって1学期を過ごし、運動会での係活動や全校を代表してのプール清掃、日々の委員会活動などを通して、高学年としての自覚が高まってきた。そこで今回、来年度入学してくる新1年生とその保護者に向けて、A小学校を紹介するリーフレットを作成する活動を設定した。

5年生にとって来年度新1年生になる児童は、自分たちが最上級生としてA学校を代表して4月からお世話をするようになる相手である。その相手に、自分が5年間生活してきたA小学校のことを伝える活動を行う。それによって、あと半年でA小学校の最上級生になる5年生にとって、相手意識、目的意識を強くもって文章を書く活動になると考えた。

・リーフレット作りの流れ

具体的にはまず相手意識をもちながら書く題材を決める。次にどの題材をどれぐらいのスペースを使ってどこに書くのか割付を考える。一番伝えたいことを一番大きくスペースを割くように指導する。その後見出しや図絵などを含めながらリーフレットを作成する。リーフレットの記事には、A小学校で5年間生活しているからこそ分かることや、それについて自分が感じることを書くようにする。また、リーフレットのいずれかの場所に自己紹介や読み手である新入生の保護者へのメッセージを書く。そのことにより、読者はこのリーフレットにこめられている5年生の思いを知ることができると共に、リーフレットへの感想を書きやすいと考えた。

・相手意識「新入生の保護者」の明確化

今回の学習では、書く相手を新入生の保護者とした。その理由は、5年生のもっている書く能力を最大限に発揮できる相手だからである。本来であれば児童が本当に書きたい相手は、おそらく新1年生であろう。しかし新1年生では、難しい言葉も分からないし漢字は全てひらがなに直さなければならない。5年生が自分の表現したいことを表現しよ

うと思っても、それを相手に合わせて簡単になさなければならない。もちろん、相手に合わせて表現を簡単にすることは相手意識としては重要なことではある。しかし今回は児童に自分のもっている書く能力の全て使って表現してほしいこと、新1年生は文字も読めない児童も多くいるのでリーフレットの意味が分からない児童もいることから、書く相手を新入生の保護者とした。

・目的意識を大切に活動

「学校のことを知らない相手に、リーフレットで学校紹介をする。」となったとき、児童は「自分の伝えたいこと」を真っ先に思いうかべてそれを書こうとするであろう。つまり、その時点での目的意識は、「自分が作成したリーフレットを読んでもらうことで、相手にA小学校のよさを分かってもらう。」というものである。しかし、今回のリーフレットはそれだけでは不十分と考える。学習指導要領解説「国語編」の高学年「B書くこと」の指導事項ア(1)には、「考えたことなどから書くことを決め、目的や意図に応じて、書く事柄を収集し、全体を見通して事柄を整理すること」とある。その解説には、「『考えたことなどから書くことを決める』とは、家庭や地域、学校生活での学習などで感じたり考えたりしたことの中から選択して書くことを決めることに加え、いくつかのことを比較したり、関係づけたりしながら課題意識を明確にしていくことも意味する。」とある。今回は、この「課題意識」を大切にしていきたい。したがって、先述の「自分の伝えたいこと」に加えて、「相手(新1年生の保護者)が知りたいこと」を考え、それらのことを比較検討しながら今回のリーフレット作りの目的、つまりここで言う課題意識を明確にしていくことが重要だと考える。

指導の工夫

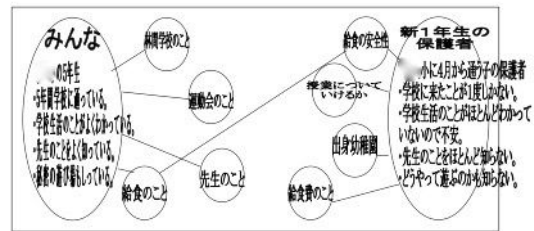
・目的意識を明確にするための手だて「新1年生の保護者が知りたいことの取材」

今回、リーフレットを作るにあたって、何のために学校紹介リーフレットを書くのか、という目的意識を児童と活動を進める中で明確にしていきたい。そこでまず、リーフレットを書く活動に入る前に自分の親や他の保護者(特に今6歳児を持っている保護者)を対象に児童たちが直接取材をし、新入生の保護者がどんなことを知りたいのかを調査する。おそらく取材を通して、自分の子どもが通うに当たって学校での安全面や健康面を心配するような、児童が予想していなかった項目が出てくるだろう。そして児童は、自分が伝えたいことを書くだけでは不十分なこと気づくと考える。その結果、目的意識として「私たちが作ったリーフレットを読むことで、新1年生の保護者(新1年生)にA小学校のことを知ってもらい、入学の日を楽しみに(不安をなく)してもらおう。」というような活動の目的が設定されると考える。ちなみに「A小学校のこと」には、「1保護者の

知りたいこと」と「2こちらが知らせたいこと」で、保護者が知らない可能性が高いこと」の2つが入っていることを児童には常に意識させていきたい。

・相手の知りたいことと、自分の伝えたいことを結びつけるワークシート

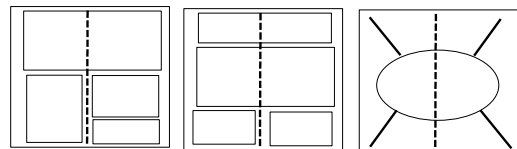
前述の通り、リーフレットを読んでくれる新入生の保護者に読んでよかったと思ってもらうためには、書き手である児童が伝えたいことだけでは不十分である。また逆に学校のことを知らない新入生の保護者が知りたいことだけ書いたとしても、A小学校のよさを十分に伝えるリーフレットにはならないだろう。そこで保護者の願いと5年生の児童たちの願い、その2つを結びつけるワークシ



ートを活用する。

左側には自分がどういう人間かを書き、右側には保護者がどういう方かを書き、お互いの特性を明確にする。その上で、自分が伝えたい項目を書き込んでいく。おそらく児童は、運動会や宿泊などの学校行事や、図書館やグラウンドなどの施設の紹介、給食のことなどを伝えたいと考えて書くだらう。次に、アンケートで調べた保護者の知りたいこと(安全面での不安など)を項目化して書き込んでいく。そして、自分の伝えたいことと新1年生の保護者が知りたいことが結びついたところは線でつなぎ、それを書く題材とした。また、自分が当初伝える予定のなかったことでも相手が知りたいことであれば積極的に書くこととした。当然逆の場合、つまり相手の知りたいことに入っていないでも自分が伝える必要があると判断すれば書いてよいこととした。

・相手に見やすくすることを意識させる学習材「リーフレット」



今回は学校を紹介する学習材として、リーフレットを用いた。リーフレットはパンフレットとよく混同されるが、パンフレットは複数の用紙から作られる冊子形式の表現メディアであるのに対して、リーフレットは1枚の紙を折って作られるものである。たいていリーフレットは同じものを多数印刷して配ることを目的とするが、今回のリーフレットは5年生が新1年生の保護者それぞれに向けて思いを込めて作った世界に1つだけの

リーフレットとなる。また、リーフレットを用いて表現することの効果は、相手に見やすく分かりやすくなるようにはどうしたらよいか考えさせることができるということである。本活動では、「相手に見やすく分かりやすく」という思考を大きく3つに分けて捉えている。

1つ目は割付である。どの記事にどれだけスペースを割くのか、記事もどのような場所に、配置するのか全て自由である。今回授業者は、普段様々な施設に置いてある本物のリーフレットを何種類か用意して、児童たちの参考にさせた。リーフレットは折ったものを広げて読むことが基本なので、折り目を利用すると様々な表現パターンができる。どれがいいのか、児童が自分で考えることができるのである。また一番伝えたいことに一番スペースを割くことで、相手に伝わりやすくなるということもある。記事をどれも同じように扱うのではなく、1番伝えたい記事と、2、3番目の記事というように軽重をつけるよう考えさせることもできる。伝えたいことの軽重の差をつけるということは、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすることにつながる。

2つ目は図や絵を使うことである。リーフレットは文字だけでは相手に伝わりにくい。図や絵を使うことで、相手に分かりやすく伝えることができる。どの図絵を使うのか、その図絵をどれぐらいの大きさでどの場所に置くのか、それも考えなくてはならない。図絵や表などを含めた非連続型テキストの表現力を育てることもできる。

3つ目は見出しをつけることである。リーフレットの記事のほとんどにはその記事の内容を表す見出しが付いている。どのような見出しを書けば相手に分かりやすくなるか、だけではなく、相手を惹きつける言葉の使い方も考える必要がある。また見出しは記事の目的に応じた要約と考えることもできる。見出しをつけることは相手意識・目的意識をもたせるために重要な役割を果たすと考えられる。

(2)児童の学習プロセスについて

インタビュー調査から

抽出児を一人決め、その児童の単元全体の活動を記録し、その意図をインタビューで聞いたところ、大きくわけて3つの思考をおこなっていることがわかった。

トランスクリプト1

A えっとーやっぱり一番親が心配することだと思って...

B うん...どうしてその三つが一番親が心配すると思いました？

A 給食は、なんかおいしくても、安全な...
なんか...ちゃ...安全かどうかで、もし子ども...もし安全じゃなかったら、子どもがおなかを壊したりするし、するし、するから、なんか親もそれが心配になって...

B うん。

A で、いじめは、やっぱり子どもがいじめに遭うと、学校に行きたくないって言われるから、そ...あの...それで、親...そのことが一番心配かなーって...思いました。

1点目は相手意識である。この学習では新1年生の保護者がリーフレットを渡す相手に設定されているが、新1年生の保護者は何を知りたいのか考えている場面が見られた。例えば以下の様なことがインタビューから明らかになった。(A 児童 B 筆者)

トランスクリプト1、2のように児童はリ

トランスクリプト2

A なんか、さ、あれーなんか、偉そうな言い方とか、そんな感じになっちゃってたから、どういう言い方をすればいいかなってずっと迷ってました。

B 偉そうって、誰にですか？

A えー新一年生の保護者に。

リーフレットの読み手である新1年生の保護者を意識していることがわかる。トランスクリプト1では、リーフレットに書く内容、トランスクリプト2では書き方、言葉遣いが新1年生の保護者にふさわしいかどうかを考えていると見ることができよう。

またトランスクリプト3のように、リーフレットの間接的な読み手である1年生も意識して難しい言葉を使わないようにしている様子も見ることができた。

トランスクリプト3

B なるほど。じゃあ、あともここもインタビューのときはさあ、「異物混入」って書いてあったよね？それなんで「食べ物以外のものは入らない」って言葉に変えましたか？

A え、自分でわからないから、自分でわかんないことを新一年生に伝えるのは良くないかなって思って、自分でわかる言葉に書き直しました。

2点目は、児童は書くメディアであるリーフレットの特徴やスペースも意識しながら書いているということである。

トランスクリプト4

A どんな折り方だとわかりやすいか、考えてた。

B あー。先生のと自分ののは違ったじゃん。

A はい。

B あれは、どうしてそうしたの？

A いや、折り方がよくわかんなくて、パンフレットふうの折り方になっちゃった。

リーフレットはひとまとまりの文章を書くというよりは、割り付けを考えて記事を配置していく形式である。そのためトランスクリプト4、5のように記事の割り付けを決める

トランスクリプト5

B なんか、あなたけっこうスペースを気にしてたんだけど、けっこうスペースは意識して書いていました？

A はい。

B どういうところ意識していました？

A えっと、まあここしか書けなかったから、ま、こんなかで、一番文が長いのをここにしたりした。

折り方、そのスペースに入るような文章量を児童は考えて書いているとみることができ

トランスクリプト6

B あ、まあ、リレー書こうと思ったんだけど、まあ、リレーはないんじゃない？一年生ではやらないからって言われて

A っていわれたね。あなた言われたもんね。(笑)

B それで、あ、そうだって思って。それで。はい。

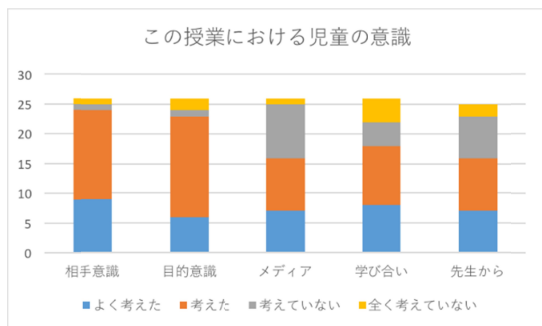
A それでけっこう友達からのことも、なんか

B 教えてもらって書きました。

よう。

3点目は、児童は、仲間と学び合っているという点である。トランスクリプト6で友達から「リレーを書くのはどうか」と言われ、そこから書く内容を変えている。つまり書く内容を選ぶ判断材料として友達からの助言があると見ることができよう。

質問紙調査から



単元終了後児童に何を考えて書いたのか、質問紙で調査を行った。その結果が上図である。相手意識、目的意識、メディア意識、学び合い、教師からの助言、全てにおいて、「よく考えた」と「考えた」の合計が、「考えていない」「全く考えていない」の合計を上回っている。特に、「新1年生の保護者」という相手意識や「学校に安心してきてもらおう」という目的意識は9割近い児童が「よく考えた」または「考えた」と答えていることがわかった。

(3)考察

内田(1990)の研究は、児童は相手意識、目的意識のない作文を原稿用紙に書いたものであり、その結果、「プラン」、「検索」、「喚起」、「言語表現化」、「読み返し」という個人の中の方略しか出てこなかった。しかし、この研究ではその方略をどのように行なうのかについて分析を行った。そのことにより、相手がどう読むか、相手に何を伝えたいのか、書くメディアの特質からの思考、友達との学び合いなど、実際に児童が教室で行う書く活動の中で行なう思考がより多様であることがわかった。

その結果「プラン」でも、相手意識からの

「プラン」か、目的意識からの「プラン」などと分類することにつながると考えている。

<引用文献>

内田伸子(1990)『子どもの文章』東京大学出版会

汐見稔幸(1988)「書くことと「やさしさ」」茂呂雄二著『なぜ人は書くのか』東京大学出版会

大内善一『作文授業づくりの到達点と課題』東京書籍

渋谷孝『作文教材の新しい教え方』明治図書

細川太輔(2014)「編集して本をつくる書くことの学習」『国語科授業を活かす理論×実践』編者 大熊徹 山室和也 中村和弘 東洋館出版社 pp.52-64

細川太輔(2012)「コンピュータを使って書く」『教材学研究』第23巻 日本教材学会 pp.197-204

文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版

の場正美・柴田良章(2013)『授業研究と授業の想像』溪水社

秋田喜代美・藤江康彦(2010)『授業研究と学習過程』放送大学教材

秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学(2005)『教育研究のメソドロジー』東京大学出版会

細川太輔(2013)『国語科教師の学び合いによる実践的力量形成の研究 -協働学習のアクション・リサーチの提案-』ひつじ書房

5. 主な発表論文等

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~taisuke/work.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

細川 太輔 (HOSOKAWA, Taisuke)

東京学芸大学・教育学部・講師

研究者番号：70738228